Felix Holt, the Radical における二つの主題をめぐつて

藤　井　元　子

George Eliot は *Felix Holt, the Radical* (1865-66) の創作にあたつて，二つの主題を心にいだいていたと考えられる。[1] 一つは，この小説の表題に表わされている Felix Holt を中心とする政治的テーマであり，今一つは，the Transomes をめぐる道徳的，且つ悲劇的テーマである。前者において，作者は政治的制度の改革と社会を営む人間の生活との関係について，彼女なりに考えていた結論の劇的表現を試みようとしているのであり，後者においては，個人における人間としての成長発展が，環境や，人生の転機においておこなわれる選択によつて，徐徐にはばまれてゆくさまを描こうとしているのである。さらにいうならば，前者は，*Felix Holt* に先行する諸作品において，ある特定の政治思想に対する，あるいは，ある特定の政治環境に対する作者の関心が比較的稀薄であつたことからわかるように，[2] 作者によつて試みられた最初の主題であり，後者は，彼女の他のすべての作品に見られる，道徳的色彩の濃いものである。そして，これらのテーマを結びつけるために作者は，小説の舞台として，1832年の第一次選挙法改正案通過当時のイギリス中部における小都市，Treby Magna を選んでいる。

ところで，われわれが，この小説の表題からうける印象は，いうまでもなく政治的主題が優位を占めている，ということである。われわれはまず，"the Radical" という言葉の持つ歴史的，政治的響きに眩惑される。[3] しかしながら，小説を読み進むにつれて，われわれが感じさせられることは，必ずしも，作者は，この物語を政治的テーマで貫こうとしていない，さらに換言するならば，作者は一般大衆に対する政治的教化をめざして，この物語の構成にあたつたのではない，[4] という印象である。そこで，これらの印象をもとにして，次のような疑問を作品の上に投げかけてみることにした。すなわち，「George Eliot は，最初から政治小説を念頭において *Felix Holt* の創作にあたつていたのであろうか。」又，「この小説の構成は，先行作品と同じく "萌芽"[5] たるべき一登場人物——たとえば，*The Mill on the Floss* の Maggie, *Silas Marner* の Marner の如き——が中心となつて，そこから枝分かれするような形でなされたのであろうか。もしそうだとするならば，この萌芽たるべき人物になつているのは，Felix Holt であろうか，それとも，物語の始めに大きく浮かびあがつてくる Mrs. Transome であろうか。」などという疑問である。この小論においては，これらの疑問を問題の足がかりとして，主要な二つの主題の面から作品を取り上げると共に，作者の創作中に書きとめられた日記，および notes[6] などを参照しながら，創作過程を眺め，かくすることによつて，*Felix Holt* に表わされた George Eliot の art の特質の一面について考察してみたい。

I

1865年3月29日の日記に，George Eliot は "*I have begun a Novel.*"[7] と書きしるしているが，これが日記における *Felix Holt* についての作者の最初の言及である。この前後，すなわち，3月から5月にかけて，彼女は，この年に創刊された雑誌，*Fortnightly Review* や，*Pall Mall Gazette* に数篇の論文を寄稿するかたわら，5月10日付の日記にしるしているように[8]，Aeschylus の悲劇や，*The Theatre of the Greeks*[9] や，Klein の "History of the Drama"[10] などを読んでいる。つまり，*Felix Holt* を書き始めた当時における彼女の関心の半ばは，主としてギリシヤ悲劇にむけられていたようである。それは，これより一，二ケ月以前，すなわち2月21日に夫の George Henry Lewes にその草稿を取り上げられたことによつて中断された a poetic drama（これは後年すなわち1868年に出版された *Spanish Gypsy* の原型である）への執着につながるものであろう。が一方において，このギリシヤ悲劇への関心は，*Felix Holt* における the Transomes をめぐるテーマに通ずるものがあることは，見のがせないようである。George Eliot はその未完の "Notes on the Spanish Gypsy and Tragedy in General" の中で次のように述べている[11]。

「個個の人間の運命を見つめていると，私は，そのおのおのの中に，多少なりとも悲劇的なもので織りなされた物語を見るような気がする。そして，こうした考え方にもとづいて，私の創り出す劇の素材は定められる。……よい悲劇の題材は，ありきたりのものではないにしても，充分ありうるものでなければならない。しかも，この題材が真に悲劇的であるためには，それは個人と全体——すなわち，全体性の程度の差こそあれ全体——との和解の見込みのない争いでなければならぬ。このさい，われわれが共感するのは個人であり，抗し難い力を認めるのは全体である。」

これは，悲劇，ならびに悲劇的題材に対する George Eliot の考えの一端を表わしていると解することが出来よう。ところが，他方において，われわれは *Felix Holt* の Introduction の中に，かかる悲劇観を裏書きするかのごとき陰うつなアトモスフィアが漂つているのを見いだす。すなわち，Introduction の結びの部分で作者は，

「すべての罪業は，めくら滅法這いあがろうとする意図の挫折や，必然的にともなう堪え難い苦悩や，すぐさま満たされはするが，過ぎ去つた昔の堕落行為から，死同様の命を得て生きながらえ，悲しい結果の呪(のろ)いを受けねばならぬ欲望をともなうものである。すなわち，すべての罪業は，人の短い一生の，過去と未来につながる永劫(ごう)の生にいたるまで，肉親の絆(きずな)という悲劇的痕跡をとどめるものであつて，かかる痕跡こそ，意志と宿命との隔絶に対する人間の認識がなされて以来，ひとびとの心に，憐びんと懼(おそ)れとを呼びさましているのである。」[12]

と述べている。これは小説の中の the Transomes にまつわるテーマの中心をなす思想の表現とみてよい箇所であろうかと考えられる。特に，この中の "some tragic mark of Kinship in the one brief life to the far stretching life that went before, and to the life that is to come after, such as has raised the pity and terror of men ever since they began to discern between will and destiny." という表現に示されている主題は，当時，作者がギリシヤ悲劇を通して，深く瞑想していたとおもわれるものであろう。同時に又，ここにお

いて，George Eliot は，彼女が他の多くの作品において表現して来たところの，道徳的決定論にもとづく個人的運命の推移を暗示しているのではないかと考えられる。なぜならば，「すべての事柄には，その原因たるべき先行的事実が存在している。」[13] という決定論的思想が，*Felix Holt* にいたるまでの，George Eliot の諸作品において，一つの主要なモチーフとして，貫かれているからである。かかる世界においては，単独で存在し得るものは何もなく，過去も未来も共に，現在の中に含まれている。そこにおいては，人はみずからの環境と，さらに又みずからの過去との絆を絶ち切ることは出来ない。人間の堕落行為によつて生ぜられた罪の意識は，かかる絆の強さによつて深められている。

さて，Introduction において，作者が表現しようとしているのは，上に述べられた悲劇的主題の暗示のみではない。特に，その書き始めの部分において，物語の舞台となる Treby Magna およびその周辺の田園的風物が，乗合馬車の客の目を通して，回顧的に眺められ，又，そこの住人の生活が，産業革命という新しい時代の波に押し流されて，次第に変貌していく様子が，かなり経済的見地からとらえられている。ところが，第一章に入ると，悲劇的テーマは Mrs. Transome の登場によつて具体化され，人物，およびそのおかれた situation に対する道徳的，心理的追求がなされるようになる。しかしながら，ここではまだ，政治的テーマは，大きく前面に浮かび上つてきていない。

Mrs. Transome の人柄について，作者は次のように述べている。

「彼女には，高貴の生まれからくる傲慢な態度があつた。こうした態度は，いざ革命ということになると，彼女を暴徒達の憎悪と罵詈雑言の対象にするようなものであつた。また，その容姿は，社会的地位の高さを物語るかのようで，そのために，誰も彼女を無関心のまま見過してしまうことはなかつた。彼女の姿は，妃としてでなく，生得の権利で君臨する女帝，いうなれば，内紛にもめげず，国を統治し，国家間の協定にあえて違反し，相手方の報復的侵略をおそれ，つぎつぎに他国の領土をわがものにし，絶望的事態に瀕(ひん)しても，なおかつ，反抗的であり，永久に満たされることのない女性としての心の渇(かわ)きを感じなければならない女帝，にふさわしいものであつた。……若かりし頃の彼女は，聰明で，教養のある女性として通つていた。そして，自分でもむしろ知的な面で秀(ひい)でた存在になりたいと思つていた。それゆえ，彼女は，フランスのいわゆる危険な作家たちの著したものの中で，比較的肩のこらない小説をひとりひそかに拾い読みし，人前では，バーク氏の文体がどうの，シャトーブリアンが雄弁だのと語り，『抒情歌謡集』をけなし，サウジー氏の『サラバ』を熱愛していた。」[14]

われわれは，以上のごとき Mrs. Transome の描き方に，さらに又，彼女のおかれている situation の設定に，一種の悲劇的アイロニーがこめられているのを感ずる。この物語の始まるずつと以前に，Mrs. Transome は，自分勝手な気持から，とりかえしのつかない選択——具体的には，その夫に対して不倫を働いたという行為であるが——を行なつたことになつている。そして，かかる過失のために，彼女は，にがにがしい悔恨を味わわねばならず，それゆえ，人間的にもかたくなになり，自我を次第に固い心の殻の中にとざしてゆく。最愛の息子 Harold は，弁護士 Matthew Jermyn と彼女との間に生まれた不義の子であるが，この彼に，Mrs. Transome はすべての夢を託そうとする。

「母性愛とは，最初は没我的歓喜であり，そのゆえにこそ，ほかのすべての感情はにぶらされてしまうものである。それはまさに動物的存在の拡大であり，その自我の領域を想像の上で拡げはする。しかしながら，永年経つうちに，母性愛は，他の永続的愛情と同じ条件によつて培われない限り，すなわち，自己を抑へ，他人の経験に生きるという共感の力によつて培われない限り，もはや喜びであり得なくなる。トランサム夫人は，あのとり返しのつかない事実を，漠然と重苦しいものに感じていた。しかも，彼女は一つの信念にすがりつこうとしていた。それは，息子を独占することこそ，みずからが生きてゆく最上の目的なのだという確信であつた。そうとでも信じない限り，過去の思い出が，身の毛のよだつ程いやな相手となつて彼女を苦しめるのだつた。(15)」

身の細るような思いで過した長い才月の間，彼女が生きる唯一の目的だつた，わが子に託したこの夢も，母と子が顔を合わせるや否や，はかなく消え去つてしまう。Mrs. Transome の意識の底には，息子を独占することによつて，自己を過去との絆から絶ち切ろうとするエゴイズムが横たわつている。かかる種類のエゴイズムは，その置かれている situation こそおのおの異なるとはいえ，やはり，*Middlemarch* の Rosamond Vincy や，*Daniel Deronda* の Gwendoline Harleth の中にも見いだされるであろう。たとえば，われわれが Gwendoline Harleth に接するとき，彼女には，若かりし日の Mrs. Transome の面影を偲ばせるものがある。Henry James の Theodora が彼女について，"She is extremely intelligent and clever, and therefore tragedy can have a hold upon her."(16) と述べているように，Mas. Transome も又知的なタイプの女性である。そしてかく理知的なるがゆえに，自己のおこなつた誤つた選択に対する深い絶望的悔恨に苦しむ悲劇的な姿となり得るのである。すなわち，彼女は，Gwendoline と同じように，中期ヴィクトリア朝の地主階級という独特な背景の中において，小なまいきで，大胆ではあるけれども，女としての内面的，あるいは外面的制約から一歩もぬけ出る事の不可能な存在として描かれている。更に，これら二人の女性に見いだされる共通性は，彼女等のあまりにも豊かな想像力のゆえに，又，彼女等のあまりにも鋭い感受性のゆえに，"a ghastly companion" としての苦苦しい過去の記憶から身をさけようとする，人生に対するエゴイスティクな態度にあろうかと考えられる。

II

以上述べて来た Mrs. Transome の個人的悲劇にまつわる主題は，第二章に入ると次第に影をひそめ，これに代わり，政治的主題が前面に現われ出て来ることになる。これは，'a Radical' としての Harold Transome の立場が，彼自身の口から表明されることによつて始まる。更に第三章において，このテーマは，Felix Holt の名前が始めて読者に紹介されてから一層明瞭な形で提出されることになる。それは，政治的背景が the Transomes のグループと，Felix Holt のグループ（Mr. Lyon, Esther Lyon, Mrs. Holt から成る）を結びつけるのに恰好な手段を提供してくれるという，作者の思いつきからなされた政治的環境の提出であろうか。いや，むしろ，われわれは，この第三章において，既に述べられたところの悲劇的主題に，社会的広がりがあたえられようとしていると見てもよいかも知れない。すなわち，作者は次のように述べている。

「トレビー教区における社会的変遷は，どちらかといえば，公共の問題であつて，その変遷の歴史は，主として二三の男女の個人的運命にかかわり合いを持つている。しかしながら，個人の生活といえども，より広い公的生活の支配をうけないものはあり得ないのである。これは太古の乳しぼり女が，仲間と一緒に放浪しなければならなかつた当時からのことである。というのも彼女に乳汁をしぼられる牛も，牧草地の草を食(は)みつくす牛の群の一頭だつたからである。……1832年の天候に関するザドキエル暦の予測によれば，政治分野という半球にかかる雲の電気状態から推して，当時の有機社会に，途方もない騒乱がおこることになつていた。それゆえ，暦の編者は，徐徐に展開してゆく多様な運命の相互作用の中に，きわ立つた予言の成就を見ていたかも知れない。というのは，選挙法改正案通過が，トレビー・マグナの混沌たる政治的諸条件に影響を与えたればこそ，ハロルド・トランサム氏は北ロームシャーを代表して代議士に立候補し得たのであろうし，トレビーの町は投票地区に指定されたのであろうし，マシュー・ジャーミン氏も非国教派の伝道師やその信徒と，愛想のよい言葉をかわす間柄になつたのであろうし，又，古色蒼然たるこの町にも，多少なりとも人を口車に乗せて，昔をなつかしむ調子のこもつたビラがべたべたはられたのであろうと言い得るからである。……

たとえていうならば，フィーリクス・ホルトという若者が，ハロルド・トランサムの生活に重大な影響をおよぼしたのはほかならぬ，上に述べたごとき政治的諸条件を通してのことであつた。ただし，いままでのところは，自然のめぐりあわせが，二人の運命をお互いにひき離そうとすることに専念してきたように思われるのであるが。[17]」

ここで，われわれは，Harold Transome と Felix Holt という二人の「急進主義者」が，お互いにパラレルな関係におかれようとしていることに気づく。[18] しかも，このパラレルな関係は，物語の進行にともなつて，いくつかの結びつき方で対照的な関係におかれようとしていると考えられる。すなわち，第一は，母親に対する Felix の反抗と，[19] 同じく母親に対する Harold の反抗とがパラレルに示されることによつてなされる結びつきである（第二章および第四章）。しかも，前者の反抗は Felix を Rufus Lyon と Esther とに接近させ，後者のそれは，Harold をその実父 Matthew Jermyn と対立させるきつかけとなつている。第二には，選挙運動の場面で，Felix は Sproxton の坑夫達を啓蒙しようとしている姿で示され，Harold は，いうまでもなく彼の運動員を通じてであるが，これらの坑夫達を買収しようとしている姿で示される（第十一章）。この場面での彼等二人の出会いは，ごく短い間の出来事で，ただお互いに道徳的な意味において，対照的なものとして示されるにとどまつている。第三は，Harold と Felix が，お互いに，Esther に対するライバルとして示されるという結びつきである。しかも，こうしたお互いに接近をたもちつつ示される対照のうち，作者によつてかなり強調されているものは，政治的な観点に立つて眺められた対照である。Felix Holt の 'a Radical' としての立場は，Mr. Lyon との対話において語る彼の次のような言葉にあらわされていると考えられる。

『……しかし，僕はそのような指環をはめ，香い油をつけている連中の仲間入りだけはしたくありません。しゅすの襟飾りで喉をしめつけさせておけば，新しい慾望や目的がわいて来るというものです。変形が

首のつけ根のあたりで起ると，まず手始めに好みが変り，次には考え方まで変つて来る。そのおつかけざまは，まるで腹をすかした犬の足が鼻の向く方にくつつきまわるようなものです。……[20]』

ここで，Felix が“your ringed and scented men of the people”と呼んでいる対象は，この部分の context から言うならば，この言葉の前に Mr. Lyon によつて発言されている“the ring and robe of Joseph”と対応されていると考えられる。すなわち，旧約聖書の「創世記」四十一章，四十二節にあらわされた Joseph はこの場合，working-man から middle-class man への self-advancement の姿として，比喩的に用いられている。Mr. Lyon が，労働階級の self-advancement を「自由」と「公共の福祉」への貢献の足がかりとして見ているのに対し，Felix は中産階級の成り上り者的生活態度に対する非難の対象として眺めようとしていると考えられる。そして，かかる非難の対象の背後には，中産階級のひとびとを利用して，労働者達をうまく手なづけようとしている，‘a Radical’としての Harold Transome が控えている。彼は，地主階級に属していながら，本質的にはプチブル的であり，楽天的エゴイストにすぎない。これに対し，Felix は上に引用された言葉にあきらかなように，みずからの所属する労働階級にふみとどまつて，その改善に生涯を捧げようとしている。彼には選挙権もなければ，これを獲得しようという意志もない。すなわち，彼によれば，「投票，選挙区，年次議会その他に関するあらゆる計画は，単なる機関にすぎない。[21]」のであり，改善の真の秘訣は「選挙法改正」とか「人民憲章」とかいう仰仰しい名称で呼ばれる諸条例にあるのではない。その真の秘訣は，労働者たるべき一般大衆が，「みずから考えて，みずから行為しようとする決意」の中にこそみいだされるもの，なのである。これが Felix の信念であり，同じ思想は，1868年1月，*Blackwood's Magazine* に寄稿した“Address to Working Men, by Felix Holt”[22]にも表わされている。もし，このような信念を，‘radicalism’と呼ぶことがゆるされるならば，それは理想主義者の夢みる「急進主義」にすぎないであろう。Joseph Jacobs が，“Felix Holt the Radical is rather Felix Holt the Conservative; he is not even a Tory-Democrat”[23]と述べているように，彼は，最後まで，伝統的保守主義から離反し得ない人物として終始している。かかる傾向は，一つには，Edmund Burke, Scott, Wordsworth の伝統に連らなる George Eliot の保守主義に由来しているかもしれない。われわれは，彼女の回顧的な初期の作品(とりわけ *The Scenes of Clerical Life* や *Adam Bede*)の中に，作者のかかる保守的態度を見いだす。たとえば，“Amos Barton”の中で，彼女は次のようにのべている。

「無限の改善！と，心の統制のよくとれた人たちは言う。そのようなひとびとは，『新警察制度』だの『十分の一税換算令』だの『一ペニー郵便法』だのと，つぎからつぎへ，人間の進歩を保証するものなら，すべてこれらを喜んでうけ入れようとする。そして一刻といえども，保守的革新の知性が居眠りをすることはない。……しかし，悲しいかな，私の心は，そのように統制がとれていない。時には，昔の悪弊をなつかしがつたりすることがある。[24]」

ここにおいて，“conservative-reforming intellect”という言葉で表現されている態度は，多少 negative なひびきを持つてつたえられているけれども，実は作者自身のもの

であり，そして，それがそのまま，Felix によつてうけつがれ，彼をして，真に実践的・政治的なものから離反させ，「政治的従属に対して義憤すらおぼえない実証主義のチャーティスト」[25]たらしめているのではなかろうか。Felix Holt が "Address to Working Men" の中で，"the nature of things in this world has been determined for us boforehand."[26] とのべているのは，フランスの実証主義者 Auguste Comte (1798-1857) の決定論的思想の影響によるものと見る事も可能であろう。更に又，George Eliot によれば，「歴史上の真の変革とは，歴史に作用する数限りない要因がつみ重ねられてのみもたらされるものであつて，革命とは，必然的に失敗をともなうものなのである。」[27] それゆえ，*Felix Holt* の政治的主題が，revolutionary なものでなくして，むしろ，anti-revolutionary なものに終始している事の理由の一つは，かかる conservative-reformer としての George Eliot の思想的傾向の中に求められるのではなかろうか，と考えられる。

III

性格描写の面から考察した場合，政治的主題の中心をなしている Felix Holt の描写は，作者の完全な失敗であると言わざるを得ない。すなわち，彼は Adam Bede や Romola や Daniel Deronda と同じように，George Eliot の客観的態度，すなわち，「人生に対する直接的な観察と記録を重んじようとする態度」から離れて，彼女の道徳意識——それは一連の行為を結末にみちびく道徳的結果論の上にうちたてられたものであるが——によつて組立てられた「善」の明細書のように reality の乏しい人物である。Felix にしても Adam Bede にしても，「善」が最後にもの静かな幸福を獲得するというテーマにはめこまれたあやつり人形にすぎないという印象をわれわれに与える人物である。

小説の中で，比較的客観的 reality をもつて，とらえられている複雑な性格は，政治的主題の中にはほとんど見いだされず，むしろいま一つのテーマの中心，Mrs. Transome の中に見られるであろう。彼女は，この小説全体から眺めた場合，あるいは，heroine としての役割はあたえられていないかも知れない。しかしながら，われわれが，彼女の性格描写に見るものは，Mrs. Transome の意識が，作者によつて深く内面から共感され，するどく実感されている，ということである。これは，さきに少しふれたように，George Eliot の最後の作品 *Daniel Deronda* における，Gwendoline Horleth の描写——それは人物の言葉と動作のほかに，さらに内面的な心理の動きをとらえようとする描き方であるが——と同じ性質のものである。[28] たとえば Mr. Jermyn との対話の場面において，Mrs. Transome の描写は，内面的心理の動きによつて表現されている。

『ハロルド君は頭が切れて利口ものだから，』トランサム夫人が一向口をきこうとしないので，ジャーミンは言つた。

『議会に出れば，頭角をあらわすこと疑いなしでしような。その上彼は，あらゆる仕事に対してすばしつこい目を持つている。』

『そのことが，かえつて私には心配のたねなのです。』と，トランサム夫人は言つた。ジャーミンと一緒にいると，いつもしのばねばならぬ，あの苦苦しい悔恨が，今日の彼女には一層激しく感じられた。だが，この気持にじつと耐えていた。常に心の内に感じている，『誤ちを犯した』という意識が，自分の言葉や行為の端に，いや，自

分のでなくても，相手の言葉や顔付に現れることに我慢がならなかつたからである。長年の間，トランサム夫人とジャーミンとの間には，過去について一切口にしないという暗黙の契約がかわされている。その理由は，彼女の方では，あの事が忘れられないからであり，彼の方では，それが，ますます記憶からうすれているからである。

『いずれにせよ，ハロルド君が奥さんに対し，不親切だとは思いません。彼の物の考え方というものが，あなたを苦しめているだけのことなんでしよう。それを別とすれば，ハロルド君は，思いやりのある息子に生まれついていると僕は思う。』

『ええ，たしかにそうなんでしようね。でも，思いやりがあるといつても，それは，男性がたが，女性に一応うわべだけでつくす程度のものなのです。クッションだの車だの買いあたえ，もつと楽しんだらよいと言つておきながら，心の奥底では，軽んじられ，ないがしろにされても，女はだまつてろといわんばかりの，そういう男性達のおもいやりと同じたぐいのものなのです。私には，あの子をどうする力もないのです。本当に。全然。』

ジャーミンはむきなおつてトランサム夫人の顔を見た。彼女のまるで自制力を失つているような物の言い方に接するのは，久し振りの事だつたからである。

『ハロルド君が，今までの奥さんのやり方を不快に思つてでもいるというのですか。』

『私のやり方ですつて／』

トランサム夫人はひどく腹立たしげにジャーミンにはげしいまなざしを投げかけながら言つた。彼女は，はつとした。自分は今，たいまつに点火して，みずから招いた愚劣でみじめな過去を照らし出すようなことをしているのだ，と気付いたからである。私は，この人と言い争いなどすまい。この人のことを，どう思つているかということなども口に出して言うまい。それは，なかば習慣と化した決意だつた。女としての誇りや感受性を傷つけないで，そのままそつとしておきたかつたのだ。それは，彼女の心の中に，手に接吻され，男性の騎士的行為の対象にされたいという，女らしい願望がひそんでいたからである。(29)

この一節において，さけ難い結果にまきこまれた，Mrs. Transome の姿は，非難がましい調子でなくて，真に悲劇的な姿として，われわれの目に映ずるように，しかも内面から表現されている。この ‘a study of Nemesis’(30) ともいうべき Mrs. Transome を中心とするテーマは，*Felix Holt* 以外の，George Eliot の多くの作品に見られる。たとえば，*Adam Bede* の Hetty Sorrel にしても，*Middlemarch* の Bulstrode にしても，*Daniel Deronda* の Gwendoline Harleth にしても，彼等は皆，過去における，自分達のまちがつた行為の罰として，救いようのない結果に見まわれ，物語の結末にいたるまで，苦悩するというテーマの中心になつている。

Felix Holt の中には，Mrs. Transome を中心とする悲劇的主題から離れて，これとは別に，素朴な魂が，次第に高い道徳的水準に目覚め，高揚されてゆく過程もあらわされている。これは，Esther Lyon に対する Felix の道徳的感化によつて示されている。これは，Maggie や，Dorothea の中に，われわれが見ると同じ高揚への過程であろうかと考えられる。(31) しかしながら，われわれが，Esther の精神的向上を，Maggie や Dorothea のそれと比較してみるならば，‘tragic intensity’ において，前者が，後者にはるかに劣つていることを認めないわけにはゆか

ないであろう。Esther が物語の終末においてなすところの選択——それは，地位も財産も捨てて，Felix と結婚し，清貧に甘んじて生きてゆこうとするという選択であるが——も，真に悲劇的な試錬に打ち克つた末に行なわれたものではない。したがつて，われわれは，この Esther Lyon をめぐる高揚へのテーマには，さして深い感銘をあたえられることはないであろう。

IV

George Eliot が政治問題を小説の題材に取り上げたのは，前述の如く，*Felix Holt* において最初の試みである。この政治的主題のために，彼女が直接，準備にとりかかつたのは，物語を書き始めた1865年3月29日より2ケ月後の5月28日前後からのことである。すなわち5月28日の日記に，彼女は，"Finished Bamford's Passages from the life of a Radical. Have just begun again Mill's Political Economy, and Comte's Social Science in Miss Martineau's Edition."[32] と書きしるしている。そして，この頃から，George Eliot は，自分で読んだ書物から丹念にノートをとり始めている。[33] これは，物語の時代となつている1832年の経済問題，選挙法改正の風潮，選挙運動や投票等に関する資料を収集する目的でなされたらしい。これらのうち，主なものを拾い上げると，J. S. Mill の「経済学」の中の「賃金論」，"the Parliamentary Committee Report on Agriculture of 1833", *The Times of 1832, The Times of 1833* などからの抜すいである。前述のように，George Eliot が5月28日以前に読んだものは主として，ギリシャ劇に関するもので，その中には政治的資料収集に関連する書物は含まれていなかった。ところが5月28日以降になると，彼女の読書の傾向が，悲劇から政治の方に向けられ始めたのである。すなわち6月15日に，アリストテレスの 'Poetics' を再読したほかは，6月25日に "English History, Reign of *Geo. III.* Shakespeare's King John." を読み，それ以後は，"the Parliamentary Report of 1835"（これは主として Bribery Report の部分であるが），7月23日には Daniel Neal の *History of the Puritans* (4 vols., 1732-38) を読んでいる。[34] これらの記録から明らかなことは，物語を書き始めてから2ケ月後の5月28日前後までは，George Eliot は，この小説の政治的主題をはつきりした形では着想していなかつた，ということである。Felix が，物語の中で，始めて登場するのは第三章においてであつたが，この部分が書かれたのは同じ年の9月末か10月であつたと推定されている。[35] だとすれば，作品が書き始められた当初において，Felix Holt という人物像が，彼を中心とする政治的テーマと共に，作者の original idea に含まれていたかどうかは疑はしくなるであろう。

以上のことから推論するならば，*Felix Holt* における最初の "萌芽" たるべき一登場人物は Felix でなくして，むしろ，Mrs. Transome であつたと考えられる。つまり，それは，作者は，この小説を書き始めるごく初期の段階においては，これを政治小説として着想していなかつた，ということを意味する。そして，これを，作品の内容にそつた面から見るならば，The Transomes をめぐる主題が，作者の作家的体験から深く考えめぐらされた心理的洞察力に富んだ convincing な悲劇であるのに対し，Felix Holt を中心とするそれが，当時の政治・経済・社会に関する資料収集に涙ぐましいまでの努力が払われたにも拘らず，characterization におい

て，何か現実性に不足し，主人公の政治に対する態度においても，積極的行動意慾にかけ，単に観念的，あるいは道徳的なものにとどまつていると考えられる。さらに，物語全体として見た場合，プロットの進行上挿入された事件[36]が，あまりにもメロドラマ的で，かえつて読者に不快な印象をのこす結果となつているのである。

結　　語

前作 *Romola* が，作者の心身共にすりへらされてしまつた労作であり，歴史的事実の再構成への努力の所産であつたとするならば，*Felix Holt* は，人物や situation の設定のために，作者が，みずからの imagination を知的な活動にゆずり渡さなければならなかつた作品，いいかえるならば，偉大ではあるけれども，その偉大さのゆえに苦しみ，かつ努力しなければならなかつた知的な作家の姿を想い起こさせる作品であると言い得る。*Felix Holt* の二つの主要な主題のうち，Mrs. Transome をめぐる悲劇的テーマにおいては，George Eliot の作家としての maturity がうかがえるけれども，作品全体としてみるならば，そこにはあの初期の田園小説にみられた，追憶されたところの personal な体験の持つ 'poignancy' や 'charm'[37] はもはや影をひそめてしまつている。実際，われわれが，*Felix Holt* の一頁一頁に目を通して見る時，そこに感じさせられることは，「作者は喜びをもつて，この作品を創作していない。」ということである。[38] そのためであろうか，われわれは *Felix Holt* から，心楽しい緊迫感と，稲妻にも似た鮮明な光のもつ効果は期待出来ない。あるいは，作品のもつ，このような重重しく固苦しい雰囲気は，George Eliot 生来の 'absence of free aesthetic life'[39] からきているのであろうか。それとも，彼女が作品の創作にあたつてとらわれていた，あまりにもヴィクトリア朝的な道徳観に由来しているのであろうか。いずれにせよ，*Felix Holt* は，George Eliot の作家としての不幸な失敗作の一つであつたということは，認めざるを得ないであろう。しかしながら，この作品は，又別の意味において，すなわち，作者の artist としての能力が，一つの輝かしい成果をおさめたともいうべき，次の大作，*Middlemarch* への発展の足がかりとして，注目すべき小説ではないかと考えることも可能であろう。

注

(1) Joan Bennett, *George Eliot Her Mind and Her Art* (Cambridge University Press, 1948), p. 154.

(2) *Felix Holt* のすぐ前に書かれた作品 *Romola* は，作者の体験を離れた十五世紀末のフロレンスを舞台にくりひろげられた，歴史小説への試みである。しかしながら，これはあくまで作者と同時代のヴィクトリア朝中期の道徳意識がもりこまれたものであつて，この中に政治的要素はほとんど見られない。

(3) 'Radicalism' は1769年イギリスにおける議会改革に始まる。1797年 James Fox が radical reform を提唱して以来一般化した。ここでは特にナポレオン戦争末期から第一次選挙法改正にいたる期間，イギリスにおけるある政治的立場，特に Bentham 一派の立場を指称していると考えられる。すなわち，ベンサム派の philosophical radicalism は「最大多数の最大幸福」をめざし，功利主義の原理をかかげ，立法を通じ，社会的政治的不合理の是正改革のために戦おうとするものである。ベンサムの忠実な弟子が，J. S. Mill の父

James Mill であつたが，彼はベンサムより現実的であり，したがつてイギリスの封建遺制にたいしても妥協的であつた。J. S. ミルはこの父によつて功利主義の後継者として期待される。しかし，そこには現実のヴィクトリア・ブルジョワジーとの対立から次第に知的エリートの立場への移行がみられる。George Eliot は，この小説の執筆にあたつて J. S. Mill の思想に示唆される事が多かつたようである。

(4) これに関連して，Sir A. W. Ward は "On an examination of her story (=*Felix Holt*) itself, it will not be found to convey any political teaching of further purport than that which, a decade and a half earlier, Charles Kingsley and his friends had sought to bring home to the British working man. と述べている。(*The Cambridge History of English Literature* vol. XIII, II, p. 397.)

(5) George Eliot は *The Mill on the Floss* の書き始めの部分について，"My stories grow in me like plants, and this is only in the *leaf-bud*. と述べている。
(The George Eliot Letters, ed. Gordon S. Haight, vol. III, p. 133.)

(6) notes については *GE Letters* のほかに，Fred. C. Thomson の *The Genesis of Felix Holt* (PMLA, LXXIV, 5, pp. 576-84.) に負う所が大きかつた。

(7) *GE Letters*, IV, 184.

(8) John W. Cross, ed., *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals*, vol. II, p. 402.

(9) *The Theatre of the Greeks* by Philip Buckham, (1825)

(10) Julius Leopold Klein, *Geschichte des Dramas*, 15 vols. (Leipzig, 1865-76)

(11) J. W. Cross, *The Life*, III, p. 44. なお，この 'notes' が書かれた日付は不明。

(12) *Felix Holt, the Radical* (William Blackwood and Sons, Edinburgh and Lonon) vol. I, pp. 12-13.

(13) George Levine, *Determinism and Responsibility in the Works of George Eliot* (PMLA, LXX VII, 3, pp. 268-79), p. 270.

(14) *Felix Holt*, I, p. 40.

(15) Ibid., I, p. 32.

(16) *Daniel Deronda: A Conversation* by Henry James, published as Appendix in *The Great Tradition* (1948), pp. 263-4.

(17) *Felix Holt*, I. pp. 72-3.

(18) Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot*, p. 91.

(19) Mrs. Holt は亡夫の新案による丸薬の製造販売で生計を立てているが，Felix はこれをまやかし物と見て，母親に反抗する。

(20) *Felix Holt*, I, pp. 94-5.

(21) Ibid., II, p. 89.

(22) *Essays of George Eliot*, ed. Thomas Pinney (Routledge and Kegan Paul, London, 1963) pp. 415-430.

(23) *Literary Studies* (London, 1895), p. xxi, referred to in *Essays of GE*, p. 415.

(24) *Scenes of Clerical Life, Amos Barton*, p. 4.

(25) 社会主義のベテラン煽動家，George Jacob Holyoake の言葉。(*Cf.* Fred C. Thomson, *The Genesis of Felix Holt*,

p. 576.)

(26) *Essays of George Eliot*, p. 422.

(27) Geoge Levine, *Determinism and Responsibiliy in George Eliot*, p. 271.

(28) Jerome Thale はかかる描写を Jamesian と呼んでいる。*Cf.* Jerome Thale, *The Novels of George Eliot*, p. 89.

(29) *Felix Holt*, I, pp. 171-2.

(30) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Chatto & Windus, London, 1948) p. 55.

(31) Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot*, p. 62.

(32) J. W. Cross, *The Life*, II, p. 404.

(33) これらの資料は Fred C. Thomson 氏の収集されたものにもとづく。Cf. Fred C. Thomson, *The Genesis of Felix Holt*, PMLA, LXXIV, 5, pp. 576-84.

(34) J. W. Cross, *The Life*, II, p. 406.

(35) Fred C. Thomson, *The Genesis of F. H.*, p. 584.

(36) 政治的主題と道徳的主題を結びつける一つの手段として, Esther Lyon を Transome Court の正式相続人にするため，作者は財産相続をめぐるこみ入つた法律問題を二つの主題にからませようとするが，かえつて，それがプロットを煩雑にし，作品全体としての効果をそこなつている。

(37) F. R. Leavis, *The Great Tradition*, p. 33.

(38) George Eliot の *Felix Holt* に対する創作態度の一面は，1865年7月23日付の日記の中の，"I am going doggedly to work at my novel, seeing what determination can do in the face of despair." (*GE Letters*, V, p. 197.) にあらわされているであろう。

(39) F. R. Leavis, *The Great Tradition*, p. 28.